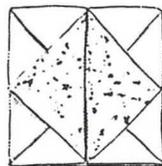


大学の嫉妬管理術

橋爪大三郎



嫉妬の公式

大学が象牙の塔であると信じられていた間、誰も大学がどんな嫉妬の渦巻きなのか、詮索しようと思ってもみなかった。しかし、それは過去の話。メッキの剥げかかったアカデミズムの看板の裏には、ごく世間並みの人間模様があるだけだと、皆思い始めた。これも知の地殻変動、知識の大衆化にともなう現象の一つなのだろうから、悪いことではない。気になることがあるとすれば、嫉妬の存在を認めたまではよいとしても、ではそれにどう対処するのかという処方箋が、見当たらないように見えることだ。

敵を知り己れを知れば、百戦危うからず。そもそも嫉妬がどういう感情なのかを、理解するところから、始めるべきだろう。だからまず、嫉妬の公式なのである。

*

嫉妬とは、「斜め」に働く邪(よこしま)な感情である。その力学は、すでにいろいろに論じられて、定説が出来上がっていると言っている。私なりに、それを定式化してみると、こうなる…

①〔同等性〕嫉妬は、(ある意味で)同等である相手に対して、働く。

②〔優劣性〕嫉妬は、相手が自分より優れている(自分が相手より劣っている)と感じる場合に、働く。

③〔下向性〕嫉妬は、相手を少くとも自分と同じレベルに引きずり降ろしたいという、マイナスの方向に働く。

以上三つの条件が揃ったものを「嫉妬」とよぶのだ、と私は思う。そこでこれを「嫉妬の基本公式」ということにしよう。

①②③は、当たり前のことで、特につけ加えることもないように思うが、いちおう説明だけはしておく。

まず第一に、嫉妬の相手は、ある観点から、自分と同等な存在でなければならぬ。どこから見ても自分と似ても似つかない相手は、そもそも自分の比較の対象にならない。あまり優れた相手や、あんまり劣った相手は、自分と関係ない存在に思えてしまう。嫉妬は、かけ離れた相手でなく、自分の同類(少なくとも嫉妬する本人が、そう認識している相手)に向けられる。

第二に、相手のほうが優れていること(あるいは、恵まれていること)。何らかの価値規準に照らして、相手のほうが優位(自分のほうが劣位)に立っていると信じていることが、嫉妬が成立するための必要条件である。この価値規準(金持ちのほうがよい、才能のあるほうがよい、美しいほうがよい、

…)を疑い始めたり、相手が自分より優れているのかはつきりしなくなったりすると、嫉妬が働くための前提が崩れてしまう。

①は、一種の同一性の条件。②は、差異性の条件である。この二つは矛盾しているから、両方を認めると、はなはだ不合理な感情に見舞われる。自分も彼(女)も、大した違いはないのに(似たようなものなのに)、一体なぜ、彼(女)だけがいい目にあうのか?

誰もが揃って、同じ人生をたどる、などということはありえない。自分と彼(女)が同じにみえるとしても、違いはいくらでもみつかるとは。なぜ、彼(女)が恵まれているのか。それは彼(女)が人知れず努力を重ねた結果かもしれない。あるいはほんとうに、偶然なのかもしれない。

前者であれば、彼(女)が恵まれていることに対して、合理的な理由がみつかったことになる。そうすれば、自分も彼(女)を見習って努力をしようという、向上心が芽生えても不思議はないだろう。あるいは、彼(女)の真似はできないと悟って、あきらめるかもしれない。いずれにしても、嫉妬の感情には結びつかない。

それに対して、後者の場合、彼(女)と自分との運命の違いは、納得できない不合理のままである。不合理であるから、自分を責め、自分を高めようとする向上心が働かない。その

かわりに、心のバランスを取ろうとして、下向きの力（相手を貶めようとする力）が働く。これは、相手への憎しみというよりも、世界が不合理であることへの復讐心のようなもので、当人はこの感情に一種の正義すら感じうる。

向上心とは反対の、下向きの力として発現するのが、嫉妬の第三の条件だ。

*

嫉妬の感情は、破壊願望の一種である。本来なら自分に向いても不思議でない攻撃を、他者に振り向ける。しかもそれが、どこかで正義（不公平の是正）に通じるという感覚があるので、その感情を自分で抑えるのはきわめて難しい。

公平とは、何だろうか？

井上達夫氏の『共生の作法』（創文社、一九八六）によると、それは「等しいものを等しく、異なったものを異なったように、取り扱うこと」であるらしい。たとえば、黒人と白人を、人格や能力の点で差別して扱うのは正しくない。両者にそうした点で区別があると考える合理的な理由がないからである。またたとえば、身体的なハンディキャップを負う人びとを、健全な人びとと同等に扱うとしたら、やはり公平でない。本人の責任でない身体的条件などで、他の人びとよりも不利な状況を強いられている人びとに対して、それを埋め合わせる措置を講ずるのは当然のことだから。

公平と正義とは、ぴったり同じものでない。けれども、人びとを公平（公正）に扱わないような制度は、正義の名に値しないだろう。人間の作った社会的な枠組み（制度）が誰かを特別扱いする場合には、必ず、それ相応の合理的な理由がなければならぬのである。

正義にもとづく公平な制度を維持するには、それなりの負担がともなう。誰もが利己的にふるまっていたら、弱者をかわう人がいなくなる。公正な制度を実現するためにひとりひとりが犠牲を払い、痛みを分かちあうこと。それが正義のコストというものであろう。

天才と嫉妬

制度を作るのが苦手な日本人は、嫉妬に立ち向かうのも下手くそだった。嫉妬のような個人的感情から絶縁したところで、組織を動かすこともしなかったし、組織が動くべきだとも思わなかった。だから嫉妬が、社会の重要なテーマになると自覚しにくいのである。

そこで話を、ヨーロッパに移そう。数年まえ、モーツァルトの生涯を描いた「アマデウス」という映画がヒットしたのを、覚えていると思う。とてもよく出来た作品だったが、成功のカギは、モーツァルトとサリエリという、二人の作曲家に焦点を絞ったことだった。

現実問題として、人間はちっとも同じでない。よく見れば、ひとりひとり千差万別である。それを、細かい違いに目をつぶって、一次近似で「人間としては等しい」と考えてしまう。そこからはみ出す残りの部分は、「個性の違い」として説明する。

ところが、こういうやり方では説明しようもないほど、飛び抜けて優秀な人間が現れる場合がある。これを、天才という。天才とは、神に愛された者。いわば神様のえご最良の産物だが、神様に文句を言ってみても始まらない。神様がある人間に、ふんだんに与えた才能を、そのほかの人間みんなで楽しめばよいのだ。天才とは、人間がみな平等であるという原則を維持するためにこさえた例外、フィクションなのだ。

モーツァルトは、このような意味での天才である。アマデウス（神に愛された者）は、モーツァルトにぴったりの名前だったわけだ。天才が天才であることに、合理的な理由が

近代は、平等な社会である。人間は誰でも、等しく生きる権利と価値を有する。そこに差別があってはならない。こういう社会の大前提を与えたのが、「神の前の平等」という考え方だった。

本で閉じこもるテキストが踊りはじめた

★週刊読書人のDMシステム

をご利用下さい(送料・税込)

定価2000円(税込)

毎週月曜日発売

10週/22000円 25週/53500円 50週/100000円

へみほん差しあげます

〒162 東京都新宿区 雑司が丘1-10-9
TEL03(2660)5791 振東京51
FAX03(2660)5507 57070

あるわけではない。サリエリは、それを甘受することができなかつた。

*

「アマデウス」という映画は、サリエリの愚かな嫉妬を通じて、天才ならざるわれわれ凡人の生き方を考えさせてくれる。天才というフィクションは、人間が平等であるという理想（ヒューマニズム）を維持するために、必要なものだった。このフィクションがあるからこそ、才能のある人間は、思う存分それを発揮することができる。

ヨーロッパ社会がこのフィクションを受け入れ、機能させるためには、ふたつの工夫が必要だった。その工夫とは、

- ①能力（ないし、業績）を、人格と分離すること。
- ②能力（ないし、業績）を、社会的地位と分離すること。

能力は、天才の属性。業績は、その産物である。この工夫は要するに、ある人が天才であることを、その人の人格とも、社会的地位とも、分離しようとするのだ。

なぜこれが、天才を社会に受け入れるのに有益なのか？

能力と人格が分離すれば、能力の評価がその人間のトータルな評価から切り離される。つまり、能力があるからといって、即、立派な人間であるということにはならない。能力の

有無が、人間の存在価値と切り離されるからこそ、天才でない大多数の人びとも、そのことを悩まなくてすむ。映画のモーツァルトはことさら、幼児的で、好色な、性格破綻者として描かれていた。だが彼は言う、「僕は品性下劣な人間かもしれないが、僕の作る音楽は高潔で完璧だ」と。

モーツァルトは社会的地位のうえでも、恵まれなかつた。少なくともサリエリのほうが、社会的地位は高かつた。

近代は、業績主義をひとつの柱としている。業績主義は、能力を重視する。能力や業績に応じて、社会的地位を配分するのが、業績主義の原理だ。

でも実は、業績主義は、能力と地位が一致しない（しえない）ことを前提とする制度である。すべての人の能力が花開いて、業績を生み出すわけでもないし、すぐれた業績がすぐに認められて、社会的地位が与えられるものでもない。もしも、実際に社会的地位をえた人びと（だけ）が、能力がある（あつた）ということになってしまふのなら、社会的地位をえていない大部分の人は、これ以上努力するのをやめてしまふだろう。才能は、努力を通じて伸びていく。多くの人びとが、自分を信じて努力を続けるためにも、天才と社会的地位とは、別々のものだと考えられていることが大切になる。

キリスト教を下敷きに、近代にかけて生まれた人間平等観（ヒューマニズム）は、天才の観念と表裏一体のものである。

そして、業績主義の原理のうえに、自然科学や、軍隊、官僚制など、さまざまな近代的な制度・組織を生み出してきた。われわれの生きるこの社会にも、天才の神話が残響している。われわれが、サリエリをひとごとでないとと思うのも、そのためだ。

大学と嫉妬

モーツァルトの音楽的天才が、万人の注目を浴びたのは、西洋音楽が伝統の桎梏から解放され、個人人の自由な創造的努力の時代に移ったからだ。作曲家モーツァルトは、新しい楽曲を作り、音楽の歴史に彼独自のものをつけ加える。その価値は、彼の作品が模倣でないこと、彼の才能が初めてうみだした美の形式であることによっている。

近代の芸術は、個人の精神世界の発露であり、個性の表現だと考えられている。芸術は時代とともに、新奇なものを陳腐なものとし、独創のあり方を深めていく。それは、独創性（originality）を追求するゲームなのである。

独創とは、その名の通り、よそに由来しないこと。作者がその作品の源泉（origin）になつていうことをいう。芸術に限らず、科学などの知識の生産も、構造は同じだ。

ニュートンの成功によつて、自然科学はキリスト教に匹敵する権威をえた。知識を生み出す制度としての、大学が教会

にとつて代わつた。大学は、自然科学を中心に、法学、哲学、医学など、近代社会が必要とする知識を生産している。この組織が従うのは、業績主義の原理である。

*

学問は伝統的に、オリジナリティー（独創性）を大切にしてきた。近代になると、この傾向がますます徹底して、誰がどういふ業績をあげたか、それは何年何月のことか、それをどこに発表したか、……というようなデータを、細大もらさず記録するようになった。その業績をうみだすのに参考にしたほかの業績が何なのかも、明らかにすることが義務づけられた。自然科学は、こういうルールに従っている。

業績主義は、個人主義でもある。共同研究もあるにはあるが、研究の基本単位は個人。誰かがあげた業績は、別の誰かがあげた業績ではありえない。ひとりひとりの業績がはつきりしてしまうのが、自然科学である。しかも、芸術作品の場合と違って、自然科学では個性の違いなど、ほとんど評価の対象にならない。自分の業績を手に入れるチャンスがそれだけ少ないわけで、きわめてシビアだと言えよう。

学問に従事する人びとの集団を、アカデミズム（学問世界）という。近代の学問は、いくつもの専門に分かれているので、アカデミズムにも、いくつもの学会が設立されている。

学会は、任意団体だから、そこに所属していても給料は出

ない。そこで、アカデミズムの人びとに職を提供しているのが、大学（や、各種の研究所）である。この職を、研究職という。

研究職は、研究者に研究をしてもらうためのポストだから、比較的時間があつて、研究をするのに都合がいい。研究職は、研究職にありつこうという研究者にくらべて、数が少ないのが普通だから、貴重なポスト（社会的資源）ということになる。誰がどの大学のどういふポストに就くかが、学問世界ではかなり重要な問題になる。

業績主義は、これをつぎのように解決する。公平の原則からして、もつとも能力ある者（これからよい研究をうんとして、社会に貢献する者）が、そのポストを占めるべきである。そして、誰に能力があるかは、本当のところは判らないけれども、これまでの業績によって、判断しよう。

大学は、業績主義、能力主義、個人主義が貫徹するはずの場所。嫉妬が生まれる条件がばつちり揃っている。大学が機能するためには、だから、嫉妬を処理するメカニズムがうまく働く必要がある。

*

嫉妬は、学問世界の心理的な負担に耐えかねた個人が起す、組織の漏電現象、精神のお洩らしである。大学の制度は、こうした現象から絶縁している必要がある。

学問世界での業績や栄誉と、大学組織内部での栄達と。このどちらをとるかという究極の選択で、後者を選んできたのが日本の研究者だ。それは、大学教員の過半数が、みるべき業績も研究能力もないという、みじめな現状にもよろう。だがそれ以上に、学問世界が、世俗社会と独立の価値規準や行動原理を確立できていないためである。

世間一般が、学問世界の価値観を共有していないのは当たり前であろう。誰の業績が抜群に優秀で、誰の業績がとるに足りないかなど、部外者にはわからなくて当然なのだ。だから世間は、教授・助教授の肩書きや受賞歴など、手っとり早く素人にわかる手がかりを見つけようとする。昔ほどの権威こそなくなったが、〇〇大学教授などという肩書きだって、まだそれなりに幅を利かせている。

そこまでは仕方がないとして、困るのは、大学に所属する学者までもが、こうした世間の価値観に染まっていることだ。

「アマデウス」の例では、能力主義はいちおう機能していた。モーツァルトの作品はますます名声を高め、サリエリの作品は忘れられて行った。嫉妬は、制度の機能に打ち勝つことができなかつた。

それに対して、日本の大学では、事情が必ずしも同じでない。日本人の嫉妬は、大学という知の制度それ自体を蝕むところまで、働くからである。

嫉妬を生み出すのは、同一性（同等性）と差異性（優劣性）の相剋であつた。アカデミズムの場合、それは、誰でもが研究者として平等であること（同一性）、にもかかわらず能力や業績にいちじるしい懸隔があ（りう）ること（差異性）、にほかならない。けれども日本の大学では、これに加えて、同じ大学組織に属すること（同一性）、にもかかわらず身分序列が異なること（差異性）、という別の要素がつけ加わる。外国の研究者も大学に籍を置いてはいる。だがそれは、仮の姿だ。それにひきかえ、日本の研究者の場合、大学は終身雇用みたいなもの。研究者としてのアイデンティティを、大学へ所属することによってしか確認できなくなっていく。つまり日本の研究者は、（公共的な）学問世界に属するほかに、あつちやこつちの大学（世俗的な組織）にも属するという、二重帰属に陥るのである。これが、嫉妬をめぐる状況を、とても複雑なものにしている。

筒井康隆のベストセラー『文学部唯野教授』は、そうした日本のアカデミズムの生態を暴露した。

唯野教授の勤める早治大学文学部は、大方の大学のごたぶんにみれず、学部長―主任教授―教授―助教授―講師―助手といった、階層序列に縛られた窮屈なミニ世界だ。そこで人びとは、ささやかな昇進の階段を昇るために、人間関係の網の目をたぐり、誰もが相手を軽蔑しているくせに、相手の歓心を買おうとする。一般社会ではごくありふれた人間模様かもしれないが、大学でそれは困る。大学は、研究の機会や研究のための資源を配分する公共的な機関であり、それにふさわしい規範（価値規準と行動原理）がなければならぬのに、それが無い。にもかかわらず、自分ではいっばしの知的生産に従事しているつもりで、世間の評価もちゃっかり当てにしているというのが、滑稽であり、また哀しいのである。

『文学部唯野教授』は小説だから、もちろん誇張である。そ

フランスの 社会主義の進化

渡辺 慧著

「認識とパタン」等、数々の
名著をもつ物理学者渡辺慧
の初期論文集。12月新刊。
■定価2266円(本体2200円)

女性と天皇制

加納実紀代編

日常生活と天皇制との関わり
を女性の目で捉え直す。
女たちによる天皇制論集。
■定価2060円(本体2000円)

増補 イデオロギーと しての日本文化論

ハルミ ベフ著

日本文化論に新たな可能性
を切り開く論文集。現代日
本を考えるために必読の書。
■定価2060円(本体2000円)

形のない家族

徳永 進著

医師として患者やその家族
と交流するなかで、見えて
きた「形のない家族」とは？
■定価1751円(本体1700円)

ケチのすすめ

—24章—

宇尾淳子著

物質的に豊かな時代にあえ
て「ケチ」の価値を問う。現
代批判の辛口エッセイ。
■定価1442円(本体1400円)

思想の科学社

東京都文京区後楽2-16-2
TEL. 03(3813)1745

れでも、日本人に大学を運営する能力があるのかという、根本的な疑問をつきつけた。

たとえば、助教授から教授への昇進だが、業績がなくて困る場合が多い。常勤の職にありつくまでは、誰でも一応熱心に研究（少なくとも、見かけ上研究にみえないと困る）に打ちこむのだが、就職したとたんに安心して、論文を書かなくなってしまう。そこで仕方がないから、「長年学内の業務に精励した」（大学の事務をコツコツやりました）なんていうことを、業績と認めることにしている大学がほとんど。これなら誰だって、教授がつとまるだろう。大学の事務とはしょせん、特定の組織に対する貢献にすぎない。そんなものをいくら積み重ねても、特定の組織と関係のない、学問世界に対して貢献した（業績を提供した）ことにはなりっこないのである。

*

学問は、厳しいものである。学説史をひもとけば、重要な業績はごくひと握りの学者によって産み出されてきたことがわかる。残りの大勢の学者は、あまり大した業績を残すこともなく、一生を終わりに、忘れられていく。

では彼らは、最初からいないほうがよかったのか？ そんなことはない。大勢のダメ学者やダメ教授がいなければ、学問世界は成り立たないのである。知識の創造に、決まり切つ

嫉妬につける薬はあるか

大学は、不断に差異をつくり出す場所だった。学問世界は、大業績と小業績とを選び分けて、業績のランキングを作る。それにもとづいて、学者にポストを配分する。こうした仕組みがないと、学問世界も大学社会も、機能しないのだ。

ということ、大学はよそにも増して、嫉妬を日々生産する場所だということだ。これを放置しておく、大学がまったく機能しなくなる。

一般の社会で、嫉妬は自然な感情である。嫉妬が存在することそれ自体、さして有害でなからう。それが、特定の機能を果たすべき社会組織に入り込むと、有害になる。では、どう対策を講じればよいのだろうか。

*

嫉妬を根絶するのは、無理である。だから、個々人が嫉妬を感じても、そんなことに左右されない、頑丈な組織を作る以外にない。これは、大学の制度問題だ。

人間が嫉妬に動かされずに判断し行動するためには、嫉妬のような個人的感情よりも上位の価値、世俗の一般社会と独立な公共的な世界が信じられていることが必要だ。それを信じていてこそ、個人的感情に動かされずに行動することもできる。これは、一種の職業倫理である。

た公式はない。こうではないか、ああではないかという、試行錯誤の繰り返しである。だから、能力に恵まれた学者が刻苦勉励、一生を費やして研究に打ちこんだとしても、空振りに終わってしまうことだってある。いや、たいていの場合そうなる。その裾野があるからこそ、学説史にのこる重要な業績も産み出される。

なんという不公平だろう。

これを少しでも埋め合わせるために、大学教授の肩書きや、努力賞・残念賞に類する栄誉もある。報われることのない大勢の学者を、心理的にケアする必要がある、大学にはあるのだ。ただし早治大学文学部のように、それを本当の業績とごっちゃにしてしまったり、唯一の価値だと勘違いしてしまったりしたらだめなのだ。

自然科学系の学部では、論文を英語で書くのは当たり前で、毎日が外国の研究者との競争だ。こういうところでは、日本人だけの仲間ばめの原理が働きにくい。業績主義をおろそかにすると、たちまち時代にとり残されてしまう。それに対して、語学や社会科学系の学部では、外国との競争なんかないに等しいから、ぬくぬくと日本人だけが生きているという、早治大学のような村共同体がすぐ形成されてしまう。

専門の職能集団には、それなりの職業倫理がそなわっている。医者には医者の、弁護士には弁護士の、警察官には警察官の職業倫理があるだろう。たとえば、職業上知りえた秘密を第三者に話してはいけない、市民の安全を守るためなら危険もいとわれない、など。彼らの行動パターンは、しばしば人間の自然な感情に反するだろうが、その職業を成り立たせ、一般の人びとから信頼をかちえるためにはどうしても必要なものだ。専門家は、そうした行動パターンを身につけるべきなのである。そして、一般人も、専門家の職業倫理に理解を示す必要がある。

大学（あるいは、もっと広く学問世界）は、もともと嫉妬のような個人的感情から絶縁するための、制度的な工夫をいろいろ内蔵しているはずだった。あるいは、キリスト教の倫理規範を援用して、そうした職業倫理にかえてきた。ところが日本では、そういうけじめが曖昧で、大学に限らず、およそ専門的な職能集団が機能しなくなっている。

*

だから、大学で嫉妬を管理するとは、大学を職能集団として再生することではなければならない。それは、日本社会のなかに、普遍性と機能性をそなえた、多様な職能集団を再確立しよう、という課題（日本の国際化）の一環となるだろう。

大学を再生するには、嫉妬だけでなく、身置員に対する対



橋爪 大三郎氏

橋爪大三郎氏が、好きなことが書ける環境があるというのに、何故あえて社会主義に賭ける必要があるのか、というわけである。

橋爪の本音はこうした感慨をストレートに表現したものである。著者の「まはりのもの」は、むしろこの明解さによって資本主義への敵愾が隠れている。社会主義経済の弊が明らかになれば、資本論の経済学、とりわけ労働論が批判される。それに比例して資本主義経済のシステムは効果性を失

理性が貫かれ、これを記号的に表現する近代経済学のシステムが回しこまれる。資本主義は真の豊満さを表現する唯一のシステムであるというのが著者の結論である。もちろん資本主義にも

理由のない不平等や偶然の頭目々もよし、また個々の思において本書に提案を出すことも不可能であろう。私には著者の近代経済学への批判は素朴なものである。労働価値論が自己

は当然としても、近代経済学への批判は素朴なものである。労働価値論が自己

資本主義の肯定から出発

同時代の核心に接続する 思考を生み出すために

堀川 哲

色々あるし、ひどいものもある。あた。けれども戦後の日本は資本主義の歴史に、新しい可能性をつけ加えた。その可能性とは、資本主義が効率的な平等社会(機会均等社会)を築くことに機能する可能性である。資本主義は、特定の誰かの利益のためにあるのではなく、万人のためにある。その過程でめいめいが自分の貢献に応じた分配を受けとることができる。資本主義の作動原理から考えると、そうした社会が実現して本意ではない。」

このように考えれば、おのずと資本主義を拒否するシステムを構築することは不可能であるということになる。もちろん、このように考えた上で、資本主義そのものがバラ色の社会だと書いたのではない。それは必ず、

しての女性を愛するものであり、資本主義に拒否されてくるとするべきものではない。このように考えた上で、資本主義そのものがバラ色の社会だと書いたのではない。それは必ず、

差別のシステムとして同じく働く職生された案件の下でしな腰をなさないものなのだ。本書のように絶望される近代経済学の専門家(産業革新政策を別として)は、むしろこうしたシステムの問題であり、本

当の問題は、本書で展開されている資本主義の肯定論を批判するよりも合理的にも批判することには不可能ではないか、というところにある。我々は資本主義を原理的に超える方向を模索するからという問題である。これは簡単にヒロシ(「ほりかわ、ついでに」)と書いておけば済むものな

問題ではない。今や、社会主義について書いた著書は、本書にみられるように、大體に資本主義の肯定から出発する方が同時代の核心に接続する思考を生み出している。 (ほりかわ、ついでに) 関大助教授・思種忠政

★はじめ、だいさくろ氏は東京工業大学助教授、社会学専攻。東大大学院博士課程修了。著書に「問題ゲームと社会理論」「仏教の意識形態」「はじめの資本主義」「意識としての社会科学」など。一九八(昭和33)年生。

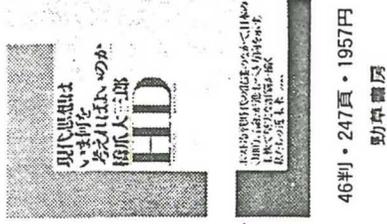
学 術 思 想

* "No More Jealousy, No More Tears—for Your Academic Career" by Hashizume Daisaburo, March 1991.

いけないのだ、という感覚(倫理)が乏しいのだ。残念ながらこういう状態では、日本の大学独特のタコ壺的な人間関係が、そのまま再生産されてしまうことになる。みんな、嫌だ嫌だ、ああ馬鹿らしいと思いつつながら、気がつく自分も澁のたまった大学組織の一員になっている。だから、大学を再生させるのには、嫉妬をなくしましょうというような心がまえ論ではなく、まず、公募のような、制度面の改革から手をつけるべきだろう。それをやりとげないと、日本の大学は看板倒れの、ろくに知識の生産に貢献しない人間の吹き溜まりのような場所になってしまう。

策も考えなければならぬ。同じ大学だから、同じ出身だから、たまたま知り合いだから、……。そういう理由で手近な人間をつい高く評価してしまうのが、身品屑である。業績主義の原理を貫き、学問世界で公平な判断をしようとするれば、その場に居ない人、自分のよく知らない人についても、よく知っている人と全く同様の扱いをしなければならない。さもないと、公平を欠くことになるからだ。日本の大学は、研究者を自分の大学で再生産しようという度合が高い。これを純血率というが、人事が閉鎖的であることの証拠だ。もしも能力主義、業績主義が十分に機能すれば、この割合はかなり低くなるはずである。そうならないというところは、大学院生の時代から教授にゴマをすり、就職の世話をしてもらっているケースが少なくない(いや、かなりの部分を占める)ということだ。こういう学界慣行が放置されたままでは、嫉妬のような個人的感情や人間関係のもつれが、モロに彼の研究者人生に響いてくる。

私は、公募主義である。大学の人事はみんな、公募で決めるべきだと思う。自分でも、公募にしか応募してこなかった。ただ、公募はあまりにも少ない。たまに行なわれても、内実を伴わない場合も多いと聞く。大学とは、研究職の配分を行なう公共的な機関であるから、たまたまそこに所属するだけの人間の個人的感情や思惑にもとづいた人事を行なっては



46判・247頁・1957円 勁草書房

現代思想はいま何を考えればよいか

橋爪 大三郎著

社会主義を叩く作業者は、おのずと資本主義の敵対者である。自分だけが資本主義のポイントには上がらない。資本主義は消費生活の向上という途徑の場面でも、自由と民主主義という政治的平面でも明らかに資本主義に負けている。こうした比較と原動力の作業を繰り返していくと、そのうちにやがて、資本主義で何故悪い、と言いたくなる。賢か